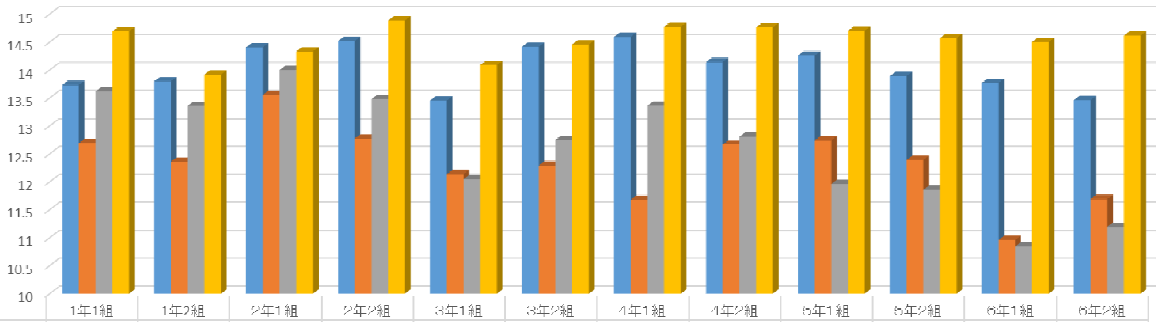
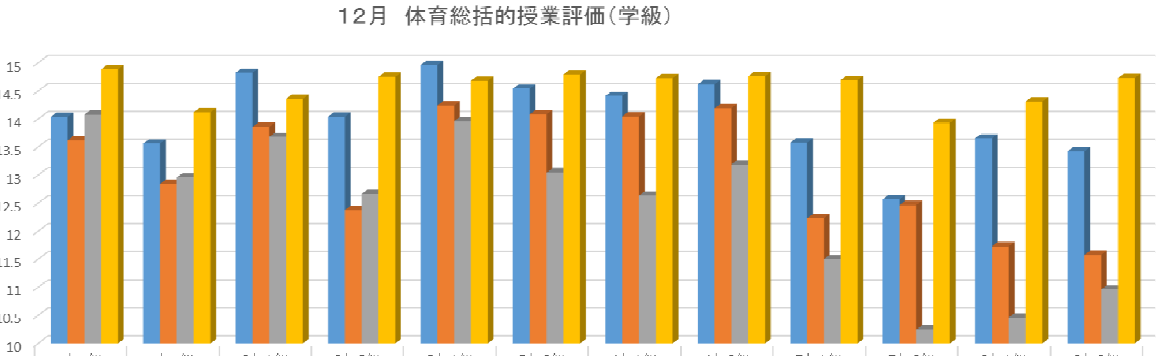
〈体育授業診断・総括アンケートから見る子どもの変容〉

本校では，重点研究教科である体育科に関して意識調査を行い，支援の在り方を見直す契機としている。体育科についての 20 項目診断・総括的評価アンケートを 4 月と 12 月に実施し，その変容から支援の見直しを行おうとしてきた。本年度の集計結果は以下の通りである。

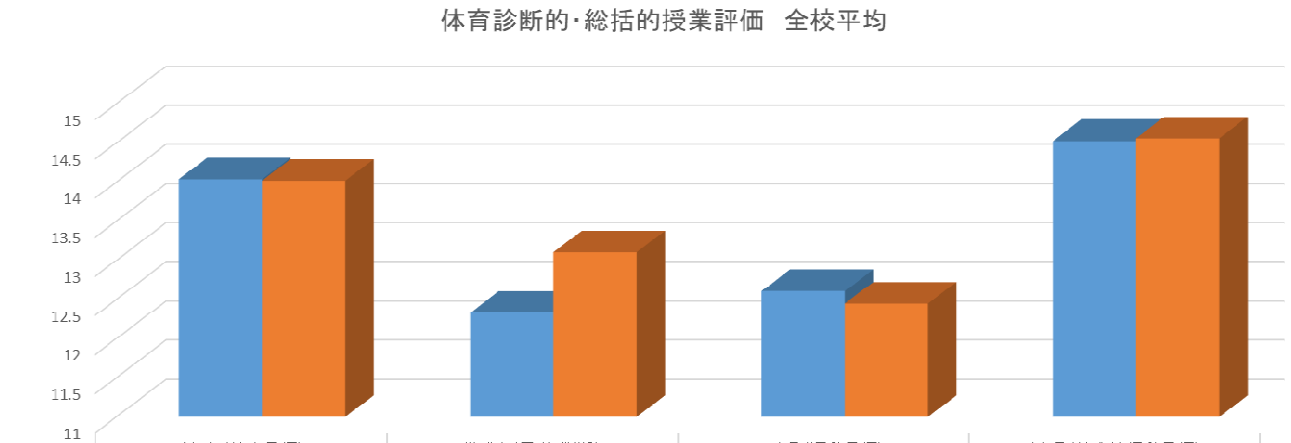
（体育科 20 項目診断・総括的評価アンケート（各項目 15 点満点　調査対象 1 ～6 年生　306 名）



	1年1組	1年2組	2年1組	2年2組	3年1組	3年2組	4年1組	4年2組	5年1組	5年2組	6年1組	6年2組
たのしむ(情意目標)	13.73076923	13.8	14.40740741	14.51851852	13.45454545	14.41666667	14.59090909	14.14285714	14.25925926	13.89285714	13.76923077	13.46153846
学び方(思考・判断)	12.69230769	12.36	13.55555556	12.77777778	12.13636364	12.29166667	11.68181818	12.66666667	12.74074074	12.39285714	10.96153846	11.69230769
できる(運動目標)	13.61538462	13.36	14	13.48148148	12.04545455	12.75	13.36363636	12.80952381	11.96296296	11.85714286	10.84615385	11.19230769
まもる(社会的行動目標)	14.69230769	13.92	14.33333333	14.88888889	14.09090909	14.45833333	14.77272727	14.76190476	14.7037037	14.57142857	14.5	14.61538462



	1年1組	1年2組	2年1組	2年2組	3年1組	3年2組	4年1組	4年2組	5年1組	5年2組	6年1組	6年2組
たのしむ(情意目標)	14.03846154	13.56	14.82142857	14.04166667	14.96	14.54166667	14.40909091	14.61904762	13.57692308	12.57142857	13.65384615	13.42307692
学び方(思考・判断)	13.61538462	12.84	13.85714286	12.375	14.24	14.08333333	14.04545455	14.19047619	12.23076923	12.46428571	11.73076923	11.57692308
できる(運動目標)	14.07692308	12.96	13.67857143	12.66666667	13.96	13.04166667	12.63636364	13.19047619	11.5	10.25	10.46153846	10.96153846
まもる(社会的行動目標)	14.88461538	14.12	14.35714286	14.75	14.68	14.79166667	14.72727273	14.76190476	14.69230769	13.92857143	14.30769231	14.73076923



	楽しむ(情意目標)	学び方(思考・判断)	できる(運動目標)	まもる(社会的行動目標)
4月診断	14.0370466	12.32913335	12.60700401	14.52574344
12月総括	14.01805306	13.10412823	12.44864538	14.56099525

診断的評価と総括的評価の診断基準

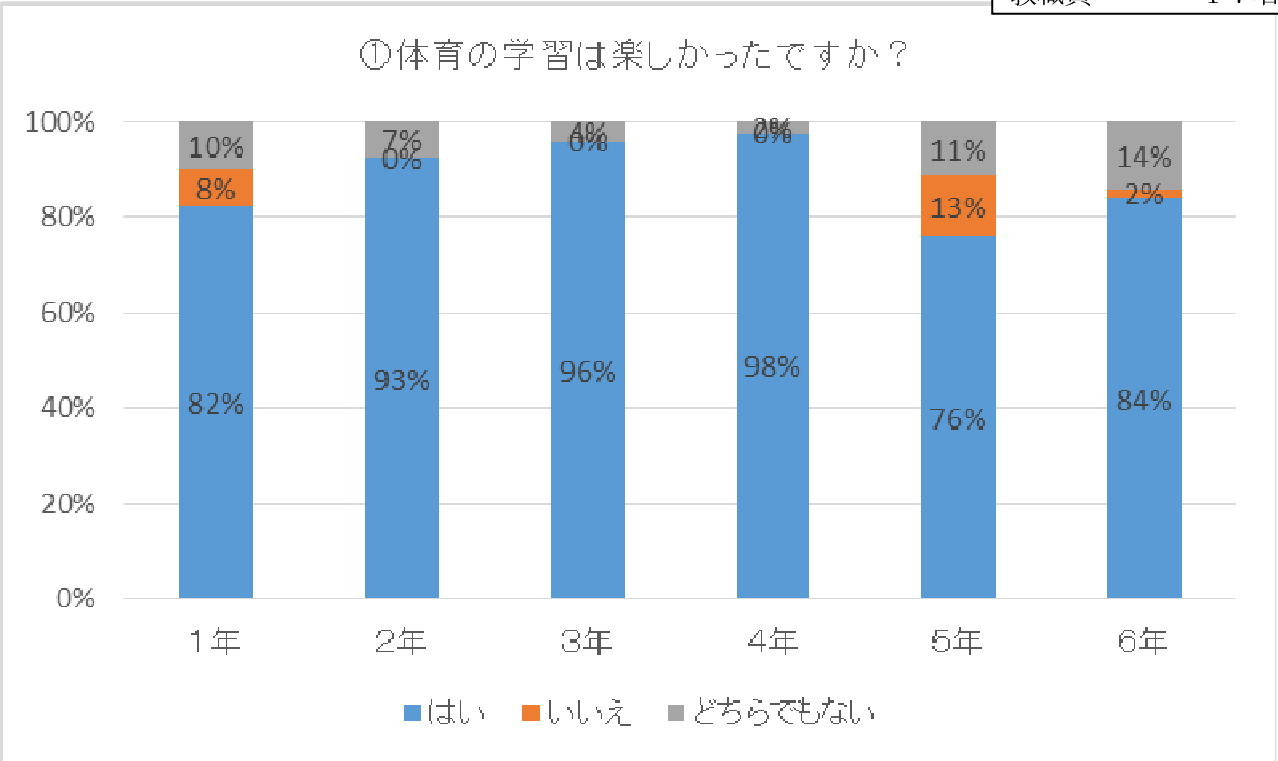
項目名	5	4	3	2	1
楽しく勉強 明るい雰囲気 丈夫な体 精一杯の運動 心理的充足	3.000～2.740 3.000～2.565 3.000～2.857 3.000～2.689 3.000～2.797	2.739～2.632 2.564～2.450 2.856～2.771 2.688～2.583 2.796～2.710	2.631～2.416 2.449～2.221 2.770～2.600 2.582～2.372 2.709～2.537	2.415～2.308 2.220～2.107 2.599～2.515 2.371～2.267 2.536～2.451	2.307～1.000 2.106～1.000 2.514～1.000 2.266～1.000 2.450～1.000
たのしむ（情意目標）	15.000～ 13.487	13.486～ 13.065	13.064～ 12.221	12.220～ 11.799	11.798～5.000
工夫して勉強 他人を参考 めあてを持つ 時間外練習 友人・先生の励まし	3.000～2.369 3.000～2.680 3.000～2.194 3.000～2.347 3.000～2.484	2.368～2.244 2.679～2.577 2.193～2.049 2.346～2.137 2.483～2.344	2.243～1.995 2.576～2.372 2.048～1.759 2.136～1.718 2.343～2.064	1.994～1.871 2.371～2.270 1.758～1.614 1.717～1.509 2.063～1.924	1.870～1.000 2.269～1.000 1.613～1.000 1.508～1.000 1.923～1.000
学び方（思考・判断）	15.000～ 11.737	11.736～ 11.183	11.182～ 10.076	10.075～9.523	9.522～5.000
運動の有能感 できる自信 自発的運動 授業前の気持ち いろいろの運動の上達	3.000～2.086 3.000～2.437 3.000～2.428 3.000～2.517 3.000～2.622	2.085～2.001 2.436～2.338 2.427～2.333 2.516～2.399 2.621～2.524	2.000～1.832 2.337～2.141 2.332～2.144 2.398～2.163 2.523～2.328	1.831～1.748 2.140～2.043 2.143～2.050 2.162～2.045 2.327～2.230	1.747～1.000 2.042～1.000 2.049～1.000 2.044～1.000 2.229～1.000
できる（運動目標）	15.000～ 11.881	11.880～ 11.490	11.489～ 10.709	10.708～ 10.319	10.318～5.000
自分勝手 約束ごとを守る 先生の話を聞く ルールを守る 勝つための手段	3.000～2.545 3.000～2.798 3.000～2.703 3.000～2.892 3.000～2.921	2.544～2.450 2.797～2.709 2.702～2.598 2.891～2.824 2.920～2.838	2.449～2.261 2.708～2.532 2.597～2.388 2.823～2.688 2.837～2.673	2.260～2.167 2.531～2.444 2.387～2.283 2.687～2.620 2.672～2.591	2.166～1.000 2.443～1.000 2.282～1.000 2.619～1.000 2.590～1.000
まもる（社会的行動目標）	15.000～ 13.707	13.706～ 13.343	13.342～ 12.616	12.615～ 12.253	12.252～5.000
合 計 得 点	60.000～ 50.309	50.308～ 48.830	48.829～ 45.873	45.872～ 44.395	44.394～ 20.000

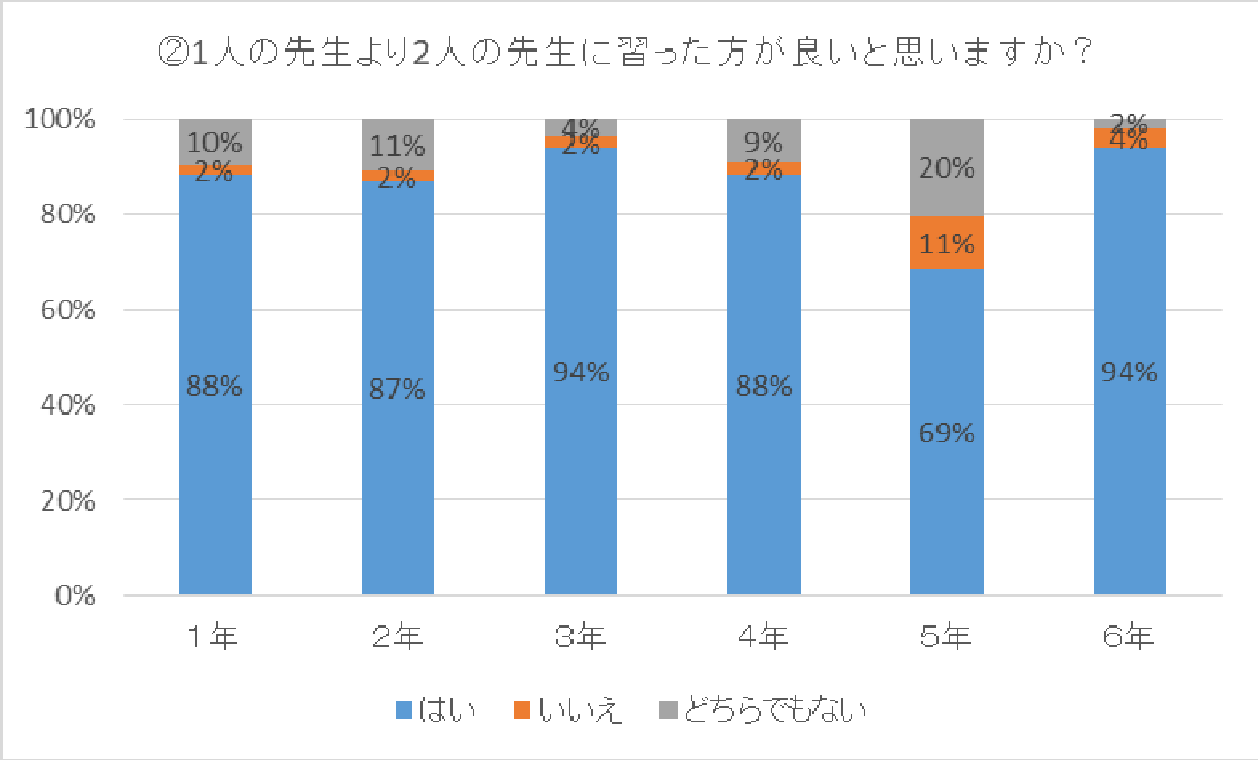
体育授業についての形成的授業評価の診断基準

次元	項目	5	4	3	2	1
意欲・関心	①楽しさの体験 ②精いっぱいの運動	3.000 3.000～2.992	2.999～2.851 2.991～2.797	2.850～2.601 2.796～2.563	2.600～2.393 2.562～2.368	2.392～1.000 2.367～1.000
	次元の評価	3.000～2.997	2.996～2.813	2.812～2.593	2.592～2.409	2.408～1.000
成 果	③感動の体験 ④技能の伸び ⑤新しい発見	3.000～2.620 3.000～2.815 3.000～2.846	2.619～2.293 2.814～2.538 2.845～2.588	2.292～1.899 2.537～2.206 2.587～2.278	1.898～1.572 2.205～1.929 2.277～2.020	1.571～1.000 1.928～1.000 2.019～1.000
	次元の評価	3.000～2.691	2.690～2.447	2.446～2.153	2.152～1.909	1.908～1.000
学び方	⑥自主的学習 ⑦めあてをもった学習	3.000～2.764 3.000～2.938	2.763～2.522 2.937～2.654	2.521～2.230 2.653～2.312	2.229～1.988 2.311～2.028	1.987～1.000 2.937～1.000
	次元の評価	3.000～2.804	2.803～2.570	2.569～2.288	2.287～2.054	2.053～1.000
協力	⑧なかよく学習 ⑨協力的学習	3.000～2.918 3.000～2.818	2.917～2.710 2.817～2.553	2.709～2.460 2.552～2.235	2.459～2.252 2.234～1.970	2.251～1.000 1.969～1.000
	次元の評価	3.000～2.845	2.844～2.623	2.622～2.355	2.354～2.133	2.132～1.000
	総合評価	3.000～2.768	2.767～2.576	2.575～2.344	2.343～2.152	2.151～1.000

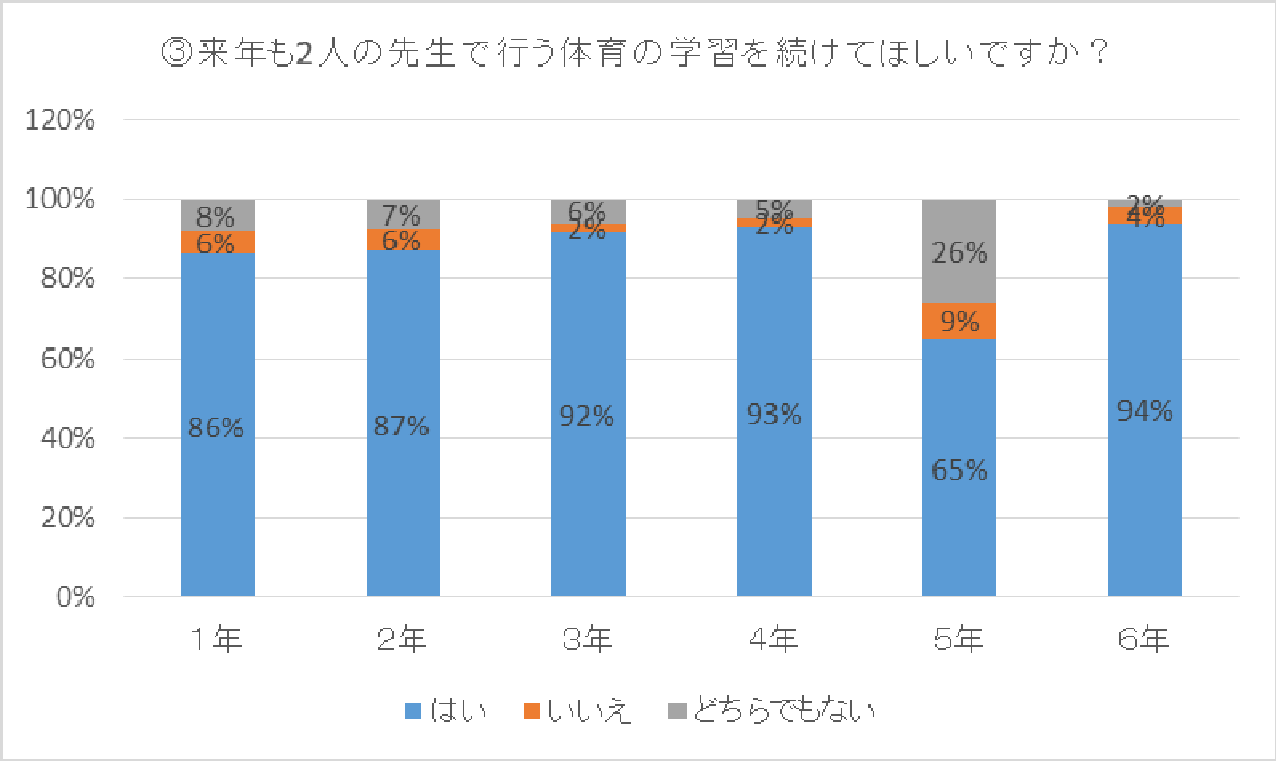
〈体育Ｔ・Ｔアンケート〉（資料）
（児童）

	調査対象
全学級児童	３０２名
教職員	１７名





はい：楽しい・わくわくする・やる気が出る・たくさん教えてもらえる・わかりやすい・たくさん活動できる・準備が整う・安全にできる・安心感・全体を見る先生と個人を見る先生（全体指導と個別指導）・練習量増・効率的・補助・声がけ励ましアドバイス増・上手になる・コツ・ポイントがわかる・ダメなところがわかる・まちがいがなくなる・広い範囲（数か所の遊具）で学習できる・補助してもらえる・役割分担・先生が協力できる・はやくすすむ・みんなを見てくれる・きびしく見てくれる・学習規律など
どちらでも：どっちでもいい，あまり変わらない
いいえ：１人の方が集中できる・ひとりで十分・意見が違うとどちらをやればいいかわからない・1人でも2人でもそれほど変わらない



○実施上の成果

子どもにとって

・楽しみながら教科の特性に触れ，運動の経験が豊かになる。
・専門的な知識が豊富で技能面の向上が図れる。
・丁寧な教材準備や環境設定，安全面での配慮が十分になり，学び方が徹底しやすい。
・子どもへの声がけの数が増え意欲向上につながったと思う。
・指導の流れがパターン化されることで戸惑うことなく安心して授業に入れる。

教師にとって

・専門性の高い授業，指導法を得られる。
・児童実態についての見取りの視点が的確で知識・技能のポイントが指導でき，意欲向上にもつながった。
・各学年の授業計画に基づいて実践内容まで提示することで予定や見通しが立つ。
・複眼での指導支援によって安全性が保たれ，児童の実態把握と技能向上につながった。
・TT 体制での授業改善は１人で考えるよりも強力であり，質の向上につながっている。
・系統だった指導ができ，担任のみでは難しい環境設定も可能になる。
・教師の業務軽減。

○実施上の課題

子どもにとって

・T1，T2 の立場（役割分担）をしっかり図らないと混乱する子どもが出てくる。（一斉指導に入りづらい児童の支援の方策としての TT 制をどう形づけていくか。）

教師にとって

・担任指導の際，専科が教える内容の差がある。TT 体制でなくてもできるよう互いに学んでいく必要がある。
・T１がねらいとする課題に対してＴ２のサポートの仕方（どこまで支援するか，どんな声がけをするか）が同じねらいを持って行えているのかが課題。
・2 人体制でする場合にお互いの共通認識（情報共有）のもと授業を行う必要がある。
・事前の相談・打ち合わせ（単元の流れ）をする時間がないので体育だいこ（通信）等で連絡を取るようにしている。（特に TT 制でない単元の進め方について）
・児童の実態把握と評価の在り方を共通認識していくこと。

○その他

・技能的に他との差が大きく気後れしていた児童が運動を好きになり，バスケットボール交歓会や駅伝の練習にも参加するようになった。保護者からも「うちの子がやりたいと言ったことに感激した。」「学校が楽しい。」と言っているというお話があった。

Ⅵ　成果と課題

〈研究のまとめ〉

本年度は体育科研究の２年目として各学年１本ずつ計６本の研究授業に取り組んだ。６本の授業については全県に公開し，外部講師を招聘して主体的・対話的で深い学びを生む授業づくりの在り方について校外からの参加者も交えて授業協議を重ね，学びを深めることができた。

【２年　表現リズム遊び（表現リズム遊び）「どうぶつランドでへんしん！」】

表現リズム遊びでは低学年の児童の発達にあわせてリズム遊びと表現遊びを毎時間組み合わせた授業展開とした。重点化した表現遊びの活動では，題材となる生き物を選択したり，動きを広げたり，変化させたりするための『動き言葉』（言葉がけ）を工夫しながら１時間ごとに必要な動きを積み重ねることができた。また，子どもたちが描いた動物ランドマップを提示し他教科とも結びつけながら学習意欲を向上させることにつながった。カルタを用いて即興的に表現したり，授業終盤に円形コミュニケーションで動きを相互評価したりする活動形態は子どもたちの意欲向上と動きを広げる上でも有効であった。

【５年　短距離走・リレー（陸上運動）「バトン，スピード，心をつなぐ！Try&Try」】

短距離走・リレーでは陸上領域の特性と児童実態をもとに，特に「意欲」喚起をねらって活動構成を工夫した。技術，身体資質（体力），意欲の３要素で身体運動のパフォーマンスを高めたいが限られた授業時間数の中で，「技術」や「体力」を大きく向上させることは難しいからだ。個々の走力に応じてスタート地点が異なる秒間走や２チーム対抗リレーを主教材として導入し，スタート後，約5～7秒後に現れる最大スピード局面も考慮し，「40m６秒間走」「120mトラック４人リレー」として環境設定（場づくり）した。

単元後半5/7の本時は２回のチャレンジタイムでチーム対抗リレーを行い，２回の合間のレベルアップタイムでは，チームでのバトンパスの向上・修正を図るといいう活動構成である。学びのパターン化や役割分担等によって児童は主体的にかかわり合いながら活動できたように思う。

【６年　バスケットボール（ボール運動）「MAKE　SCENE！　GET　SHOT！」】

バスケットボールでは，よりシュートに有効な空間が分かり動くことができるという状況判断を学習内容に位置づけ，基礎的技能の習得を図るドリルゲームとパスやシュートへの有効空間をつくる状況判断を課題としたタスクゲームで学習過程を構成した。タスクゲーム，メインゲームでは人数条件を緩和したアウトナンバーゲームやスペシャルゾーン，全員シュートボーナス等のルールを工夫しながら学習を進めた。

単元後半，第６時の本時は，オールコートゲーム①→チームごとの課題確認と練習→オールコートゲーム②という活動構成であった。チームごとにゲーム内における攻撃場面の形について学習カードに記録し，全体での振り返りを行い，有効な空間からのシュートの成功率を高めていく認知学習場面は設定できた。また，シュートで帽子の色を赤にするなど全員参加を促す仕掛けもチーム内のかかわりを深め，学級全体のシュート数向上につながったことは成果と言える。

【３年　鉄棒運動（器械運動）「くるくるくるりん十津忍者！～てつぼうの巻～」】

鉄棒運動では，単元前半で支持回転技，上り技，下り技の習得に取り組み，後半は，達成した技を工夫（方向・回数・シンクロ）したり，組み合わせたりして楽しむ活動単元７時間計画の後半６時間目。子どもたちは単元最終時間の発表に向けて自己の課題とする技の習得に力が入っていた。基礎・基本となるだんごむし懸垂やつばめ支持姿勢，ふとんの逆さ姿勢，ひざの曲げ伸ばしをしながら体を揺らすふとん揺らし，布団起こし等の動きは概ね全員が達成できていた。それまで怖さのために段ボールの台を使ってでないとふとんの逆さ姿勢になれなかった女の子はこの時間はそれを使わずにできていた。だんごむし，つばめ，ふとん，ふとん揺らし，布団起こし，つばめジャンプ，片足つばめ，フラミンゴジャンプ，雲梯渡り，登り棒上りなどみんなでできるあたりまえの動きのレベルが少しずつ上がっていき，集団としての学びはぐっと高まりを見せていた。

【４年　フラッグフットボール（ゲーム）「さらに前へ！　I　CAN　DO　IT！！」】

フラッグフットボールでは前半においてタスク・メインのゲームの行い方やランとパスを使った基本的な作戦の形について学び，本単元では後半はメインゲームを中心にしたチャレンジリーグ戦とクラスでのファイナルトーナメント戦（スーパーボール）でしめくくるよう単元構成した。６/８の本時はチャレンジリーグ３回目で，授業時間に同じチームと２回ゲームを行う。ゲーム①終了後の作戦タイムでは，チームでの作戦（動き）の向上・修正を図り，ゲーム②に臨むという活動構成である。

ボール操作の技能差が少なく，攻守分離型である上に攻防が１回ずつ区切られることがこのゲームの特徴である。こうした意味からの授業づくりの工夫としての，得点方法（コンバージョンキック含む）やアウナンバーでのプレイ人数，コートの大きさ，使用ボールの材質やサイズは提案であったと思う。活動への主体的な子どもたちの姿や励まし合い，作戦とした動きの教え合いなどフラッグフットボールでこそ味わわせたい特性に触れた姿であったのではないだろうか。

【１年　多様な動きをつくる運動遊び（体つくりの運動遊び）「めざせ！スーパー１年生！！～アドベンチャーワールドへしゅっぱつ！！～」】

多様な動きをつくる運動遊びでは「自分の体を知る」「自分の体の動かし方を知る」ための基礎的な活動を体ほぐしとグループローテーション，なわとび遊びを組み合わせて授業構成した。

導入は子ども同士のかかわりを深め，授業を明るく，温かい雰囲気になる体ほぐし(バディづくりと多様な動きを取り入れた)でスタートしました。みんなができるやさしい(優・易)運動から始めることでどの子も感覚を味わいながら安心して活動した。

前半のアドベンチャータイムでは【山登り】(ステージ)：跳び上がり・跳び下り【木登り】(肋木)：懸垂移動・腕支持・跨ぎ越し【川渡り】(ケンステップ)：バランスジャンプ・高這い【お宝】(棒・フープ)：用具操作の４か所をローテーションしながら多様に動きが経験できるようにした。すべての動きを全員が経験できること，また，動きを思考し，選択することで工夫しながら高めていくことができるバディを基本としたグループローテーションを組んで活動した。

後半のぴょんぴょんタイムでは短なわとびと長なわとびを順に経験しながら基本的ななわ回しの感覚や跳ぶ感覚を習得し，動きを広げていた。

【わくわくタイム】

わくわくタイムでは，縦割り班による異学年での関りと楽しさを意識して活動内容を計画運営し２年目となった。こうしたふれあいを中核にした活動はこれまでも継続して行ってきているので活動計画表を活用しながら今後は教師主導から児童主体の活動に移行していきたい。清掃活動と兼ねた縦割り班であることも関連するが，活動の中で人間関係が高まっていると感じている。これは，ローテーション遊びに関するアンケート結果からも伺える。短時間での全校異学年集団での活動である目的を踏まえ，定期的な活動内容の固定化を考えたい。器械遊具環境や竹馬，一輪車等も意図的に活用していくことで多様な動きを身につけていく上で有意義な場面となる。活動の内容については，児童の実態に沿って毎年見直し，修正を加えていく必要がある。

【総括】

○体育授業における手段的な方法論としての仲間とのかかわりについてはどの授業においても重点的に取り組んできた。しかし，①動ける身体つくり(身体性)・②多様な楽しみ方(多様性)・③多様なかかわり方(社会性)といった体育の教科特性(見方･考え方)に触れさせるために運動やスポーツの技術構造や指導技量を身に付け，児童の意識の流れに沿って授業展開，何を身に付けさせたいのか，育てたいのかの課題を明確にした授業構成をしていくことが重視していく必要がある。そのために，挑戦課題や達成基準を考えた上で授業構成していかなくてはならない。「やさしい，たのしい，あたたかい」環境整備・教材づくりを基本的な考え方としながらも，授業の中で個々の児童がいかに自己成長を実感できたかを問うことが大切である。

○表現リズム遊びでは，空間を広げる工夫やリズム遊びの学習内容の捉え方と位置づけ，動きの質的な高まりを見とる評価の在り方（動きの誇張・連続・変化とメリハリといった３つの視点)，教師の意図的なリードの在り方等が課題として残った。

〇短距離走・リレーでは，児童実態に応じたバトンパス課題の焦点化を図る活動構成や「わかる・できる」にせまっていくための指導者の発問（課題提示・言葉がけ）が重要であると言える。
〇バスケットボールでは，単元前半におけるプレイの原則的な理解は必要ではあったが，やはり，ゲームを中心とした活動の中でいかに戦術への思考を深めていくか考えていきたい。
〇鉄棒運動では，今後の課題として発達段階と児童実態に即した技（運動）の提示や環境設定とグルーピングの方法，そして苦手な子，意欲的でない子に焦点を当てた授業の組み立てをどう工夫し子どもの心に火をつけるかなど考えていかなくてはならない。
〇フラッグフットボールでは，児童実態に応じたパスの有効性を学ぶ場面設定（課題の焦点化を図る場の設定⇒コートの大きさ）と活動構成や作戦のふり返りができる手立て（ゲーム中の教師の言葉がけを減らして），作戦と役割がパターン化するのを崩す手立て等が今後の課題である。
〇多様な動きをつくる運動遊びでは，児童にとってどんな動きが工夫かを理解させる認知学習場面をどう設定するかや多様な動きを経験するローテーション活動となわとび運動の２つのユニットの構成の順序構成，児童のよい動きの取り上げ方・全体への広げ方を工夫が課題点としてあげられる。
〇6 年間の発達段階や適時性を考慮しながら，各領域においてこそ身に付けたい運動感覚や運動技術を明確にするとともに，「動きづくりのもと」と「人間関係づくりのもと」を１時間ごとの体育授業はもちろん，全校集団や異学年集団での体育的活動の中でできるだけ多く経験させることが重要である。
〇評価に関しては，評価規準を明確にし，即時的に肯定的な評価（金シール）を繰り返すことで学び方を形付けてきた。そうした外発的動機づけから，運動領域に応じて児童の相互評価（いいねタイム）や自己評価（赤白帽子）などを適切に取り入れ，児童自身の見る力（運動ができるメガネ）や伝える力を高めていくことが内発的動機を大きくしていくと考える。そうして運動に向かう動機が行動を起こし，それが維持され，方向づけられるために，児童の実態（能力）に見合った行動目標を設定し，その達成に向けて取り組むことができるようにするとともに，できる限り多くの達成感を味わうことができるようにすることが大切である。